

2023年8月22日

第2回 URA 研究戦略マネジメント勉強会

報告書

大学・研究機関の研究力強化に向けて

主 催

日本医科大学/早稲田大学研究戦略センター

目次

開催概要.....	3
参加概況.....	3
プログラム.....	4
事前アンケート結果	5
講演（45分）	15
パネルディスカッション(60分)	16
事後アンケート結果	17

開催概要

開催日時：2023年8月22日（火）16:00-18:00

開催場所：日本医科大学 橘桜ホール/オンライン

世話人：松山琴音，國村有弓（学校法人日本医科大学研究統括センター）

丸山浩平，重茂 浩美，城谷 和代（早稲田大学研究戦略センター）

参加概況

事前申し込み 126名（現地：30名 Web：96名）

参加者 99名（現地：36名 Web：63名）

事前申し込みに対する参加率 71%（現地：93% Web：64%）

事後アンケート（匿名） 50名（回答率：51%）

プログラム

開会の挨拶

弦間 昭彦

学校法人日本医科大学 研究統括センター センター長・日本医科大学 学長

勉強会の趣旨説明

松山 琴音

学校法人日本医科大学 研究統括センター 副センター長

講演

末松 誠 氏

慶應義塾大学 名誉教授・実験動物中央研究所 所長

パネルディスカッション

末松 誠 氏（慶應義塾大学 名誉教授・実験動物中央研究所 所長）

松山 琴音（学校法人日本医科大学 研究統括センター 副センター長）

丸山 浩平（早稲田大学 研究戦略センター 教授）

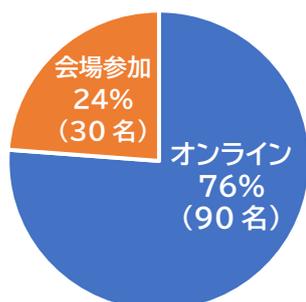
閉会の挨拶

近藤 幸尋

日本医科大学 研究部長・研究部委員会委員長

事前アンケート結果

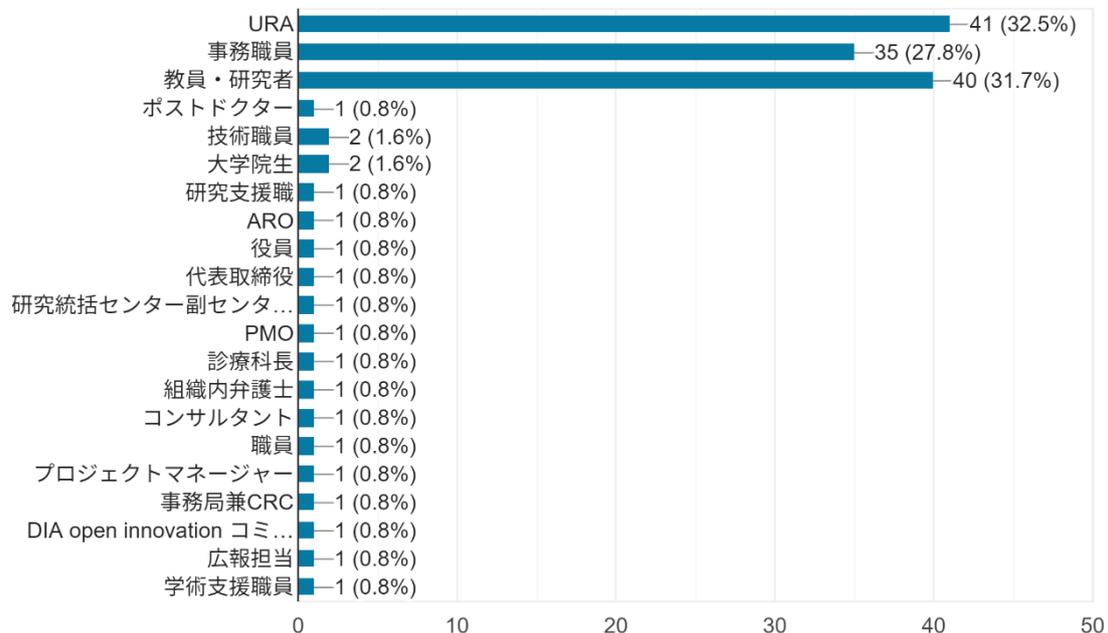
参加方法(126 件の回答)



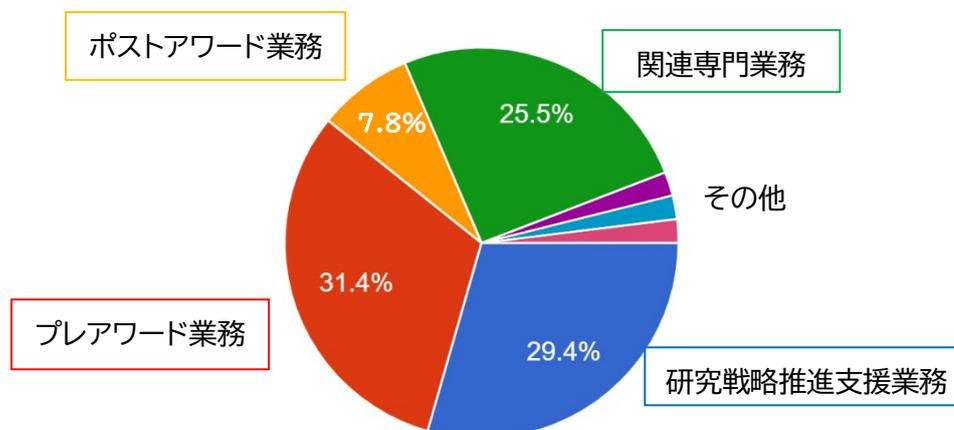
所属機関(126 件の回答)

- 大学 94
- 病院 30
- 研究機関・研究開発法人 27
- 企業 4

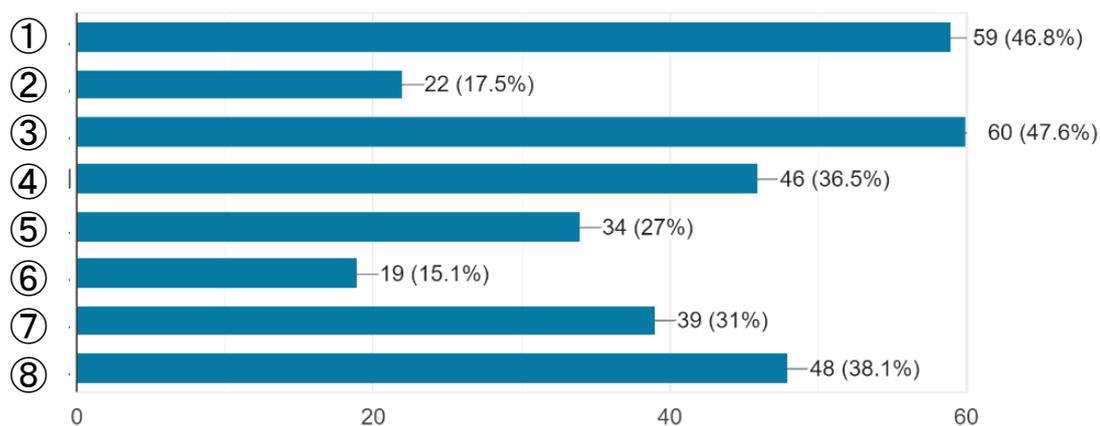
役職(126 件の回答)



現在の主たる業務(URAのみ)(51件の回答)



特に関心のある事項(3つまで選択)(126件の回答)



- ① 今後 URA に求められる付加価値を高める研究戦略の立案
- ② 今後 URA に求められるマインドセット
- ③ 戦略立案に必要な能力を高めるには
- ④ 国内外の URA 主導の好事例
- ⑤ 研究者の”研究の幅”を広げるために URA ができること
- ⑥ プレワード業務, ポストアワード業務, その他専門業務 (知的財産活動, 産学連携支援, 広報, 国際連携支援) 以外に, 今後新たに URA に必要とされる業務
- ⑦ 世界と比べた日本の URA (海外を見習うべき点, 日本の URA に求められる独自性)
- ⑧ URA が支援業務を通じて目指す今後の大学の在り方

当日、講師に質問したい事項やご意見(126件の回答)

- 各ステークホルダーを巻き込んで所属機関の研究力を高める施策立案・実行時のURAとしてのマインドセット。
- URAの好事例。
- 日本の未来がどうなるかは、若手研究者の変革の意識に掛かっていると思いますが、若手育成の観点で、研究室レベルでの徒弟的な育成があるとして、それだけでは養えずに、大学レベルで実施すべき取組みがあれば（そこにURAがサポートする）、ご教示いただけると幸いです。（国レベルでもなく、大学レベルです）。
- 若手研究者の学術雑誌発表と知財業績取得のバランスについて、特許申請～取得までの期間に当該内容に関する論文発表が出来ず、論文業績が滞ることに対する抵抗感をどのように払拭すれば良いか。また、論文業績と特許取得の評価について、他大学での事例があれば教えて欲しい。筆頭論文1報=特許業績（筆頭発明者）1件のように知財業績を論文業績と同等に扱っている例はあるか？
- URAとオーサーシップについて。
- 研究者の外部資金獲得（AMED等）を支援するために必要なスキルは何があるでしょうか。
- 研究開発においてアメリカに次ぐ研究大国となる中国では、国外へ情報を出すことが非常に難しいと聞いています。データシェアリングによるデータを作る場合、中国のデータなしで実施することは可能でしょうか？
- URAがいる大学の具体名、実際の活動、研究者にとってどんなメリットがあるか。
- URAを上手に活用する研究者とそうでない研究者のURAから見た違いと「そうでない研究者」にURAから戦略的にどうアプローチしたらよいか、教えていただけますと幸いです。
- URAの研究支援内容を知りたい。
- 医師の研究教育をどのようにすれば、他に恥ずかしくない研究ができるのか。
- 医療データ、レポジトリの継続性を担保する方策について。
- URA活動を円滑に進めるための体制づくり。
- URAについて初歩的なことからご指導いただきたい。
- 日本医科大学におけるURA活動の現状。
- 学内の一般研究者における知財戦略についてURAがどの様に関わっているのか。
- URAは技術を具現化することも目指しておられるのでしょうか。
- 知財化過程における類似・関連特許の情報収集方法について。一般的にアカデミアは外部に調査を依頼する費用の捻出は難しい中でどのようにこの過程を進めることができるかご意見・情報をお願いできればと思います。

- URA の基本構想から効果的な役割、関わりについて知りたい。
- 研究戦略立案：省庁等および大学個別の研究活動情報（発表、表彰、基金受託ほか）の共有化（情報公開、データベース・プラットフォーム構築等）の実態は？
- プレアワード：研究者の間で URA の認知度や重要性認識を高める方法は？
- ファンディングエージェンシーと大学 URA の適度な距離感を持つての有益な情報交換などについて、URA の連合体でうまく体系化できると良いと感じています。
- 我が国は世界の大学に比べ、研究の組織化・拠点化が遅れているように感じます。さまざまな知見を集積し、大きなプロジェクトを動かす仕組み作りで参考になるような事例はありますか。
- 現在の日本医科大学の URA の規模、人的資源は十分に充足しているのかどうか？ご意見お願いいたします。
- URA の将来、企業の現場での役割や職務として活躍できるようなキャリア設計はないでしょうか？
- URA に必要な資質、支援業務を通じた大学の在り方等、お勉強させていただきたく存じます。
- データシェアリングと知財とのバランスについて。
- データシェアリングで、URA がどういう関わり方ができるのか、事例を知りたい
- 機関を超えた連携が求められる時に、URA はどのような優先順位でアクションを起こすべきか？
- 研究者個人に対してどこまで URA が介入していくべきか、また、介入する際に URA に求められる専門性等についてご意見を伺いたいです。
- URA の業務範囲はどんどん広がっており、大学によってもかなり様相が違っていると感じています。URA という職種自体が過渡期にあるのだろうと考えていますが、研究畑とはまったく違う業界から来た身であり、基本的に有期雇用である URA としては、こういったスキルを優先してアップすべきか悩むところです。（その大学でしか通用しないスキルでは意味がありませんし）。また、事務職員やコーディネーターなどとの業務のすみ分けや協力体制についても模索中なので、そのあたりの話も伺えればと思います。
- 私立大学特有の URA の問題点。
- すぐれた URA には、問題解決能力、組織能力、コミュニケーション能力としては具体的にどのようなものが求められるでしょうか？
- URA 主導の好事例や今後さらに必要とされるスキルなどについて具体的に知りたい。
- 事務職と URA の関わり方。
- 研究を行いたい教員に対して、社会実装に関心を持ってもらう方法はありますか？

- URAによる研究者個人では不可能な課題解決、に関する議論に大変期待しています。私は現在、URAとして研究推進（時々経営補佐的な）業務をしています。この能力をどう伸ばすか、そして突き詰めた時にそれは今多くの大学が求めるURAであるのか（URAで経営陣はありと思っていますし、そのようになってほしいと思っています）など、日々色々と考えています。
- 海外に比べて日本の開発力は弱くなっていると感じております。その原因の一つにデータの集約化が進んでいないことだと感じています。今後、日本が開発力を高めるために現場レベルで取組めることが何かあれば伺いたいです。
- IRとURAについて：研究戦略立案のためのIR業務について、URAはどのように関与し貢献できるのか、また、大学はどのようにURAを活用すべきか、ご意見があればお願いいたします。
- グローバルデータシェアの際のセキュリティーの好事例をご教示ください。
- 世界におけるURAが関与して進んだ研究事例、成功事例を伺えればと思います。
- プロジェクト企画・形成の手法。
- アカデミアの研究者は個人事業主的な傾向が強いと感じていますが、そのような方々を機関として戦略的に結びつけるための有効なメソッドがあるのかということに関心をもっています。
- 医療研究開発において国際的にシェアすべきデータとはどんなものを想定すればよいか？
- 大学改革におけるURAの役割の本質は何か。
- 企業の管理会計に相当する研究IRと、広報や監査目的の財務会計的なIRとを区別して、前者の側面での研究IRの体制を構築する方法を考えたい。（ふつうは、財務会計的なIRで満足してしまっていると思われるが、管理会計的な研究IRで変革をマネジメントする必要があると思う。）
- 特に医学系大学に属するURAにとって重要な資質は何か？
- 国際卓越大学院の運営業務を担当しています。教育プロジェクトの中でのURAにできることを勉強したいと思っています。
- 研究者の"研究の幅"を広げるためにURAができること。
- ビッグデータをどう研究に生かしているのか海外での実例を知りたい。
- データシェアリングについての知識がないので基礎から学べるとありがたいです。
- アカデミアが生き残りをかけた産学連携のありかたとは？
- URA制度がなかなか定着しない根本的な要因はどこにあるのか？
- 研究者とURAの関係性について。
- グローバルデータシェアリングの現状。

- 臨床データの知財としての活用による収益確保とグローバルシェアリングとのバランスのとり方。
- AMEDで各種プログラムができるプロセスにおいて、URAが関与できることはありますか。
- 国際連携の場合、安全保障輸出管理規程への向き合い方、留意している点などお聞かせください。
- グローバルデータシェアリングについて知識も経験もなく、ご講演で勉強させていただきます。グローバルなものというと、例えばNIHのデータベースなど思い浮かべますが、そういったものを積極的に活用した方が良いでしょうか。
- データ駆動研究の基盤を担うデータマネジメントやデータサイエンスの専門職員は、研究者自身、技術系職員、URA、外部委託業者と、立場身分が様々になっているのではないのでしょうか。職能の所在や人事制度に関する国内外の大学の実態と、科学の社会還元のために必要な施策について、ご知見をお聞かせ下さい。
- URA目線で活動がしやすい、URA組織形態・構成についてご教授ください。
- 研究者と事務職員の架橋となる役割を担うURAの重要性は今後より高まるものと考えています。研究者の育成という観点で、日本の博士課程の教育で足りないもの（もっと多くの時間を割いて教育すべきもの）は何でしょうか。
- 日本が世界レベルでの競争力を高めるために、URAの育成以外にこれから重点的に解決すべき課題は何でしょうか。
- データシェアリングのタイミングは、どう判断すべきなのでしょう。医学や臨床系であるほどリスクを鑑みての対応が必要となると思考します。また、オンラインでオープンにする以上はいきなりグローバルデータシェアリングになると思いますが、開示しない対象国・地域という設定はあるのでしょうか。
- 競争的研究費獲得額を確実に増やす方策について。
- データシェアリングにおける利用者の利便性と情報管理（セキュリティ）の両立に関する勘所があればご教示頂きたく。同時に、シェアリングしたデータを加工した結果生成される2次データについての考え方（管理方法、知財権など）についてもご教示頂ければ幸いです。
- 事務方（職員）として、研究支援にどう資することができるのか。人文系への支援のあり方。
- スターURAはどういったURAを指すと思われますか？
- 末松先生は慶應義塾大学/AMEDから実中研所長になられて、主導される研究戦略の概要というかおおよその感じを知りたい。
- 多様な研究者の連携をどの様にお考えでしょうか。
- 国内でのデータ集積の問題点と継続的な保管管理。

- URA の育成に係るアカデミアに期待する取り組み等ありましたらご教示ください。
- 今後 URA に求められることはなんでしょうか。
- 医学部学生はこの内容について卒業時にどのように理解/参加しているべきか？支援者がいるということや支援者が何をしてくれているのかという理解を持つということが大きな意義になるように思うがその役割分担の理解のために学生教育では何を準備すべきか？
- 最近の URA は、URA が～～が得意、というタイプだけでなく、～～が得意な人が URA のカテゴリーでも活動している、というタイプの URA も増えてきています。URA とあわせて、広く専門職の貢献を含めて、当日のご講演を頂けたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。
- RWD、既にある医療データの解明をもって、様々な難病疾患の作用機序を発見する手掛かりが見つかる可能性もあるのかなとも思います。新たに被験者の介入を必要としない形で、今ある貴重な医療資源を有効活用できる手立てがあるのかどうか、IPTW 法以外にもどのような手段が今後考えられるのか、教えていただけますと幸いです。
- 現行の REBIND の成果やエコチル検査のデータなども、後々には世界と共有できるものなのでしょうか。
- 医療データの推進は、APEC/CBPR や GDPR の壁を乗り越えて、かつ被験者保護の姿勢を貫くことを目標としているかと思いますが、人種間での差別内容に不当に利用されないか心配なところでもあります。またデータの悉皆性を求めるあまり、個々の「知らないでいる権利」が侵害されないか、その可能性が心配です。法文化や過去の歴史の相違をお互いに確認し、妥協できるところは妥協して、協力しあえる体制で医療の未来をどのように描いていくのか、夢を語ってください。
- 欧米諸国の動向を見ていくと、「グローバル」に台頭してナショナリズム・保守的な傾向が多く見て取れる時代をもたらしてしまった過去も否定できないと言えます。グローバルと言いつつも、どこかで見えざる「国境」を引いてしまいか、また「グローバル」のもたらす恩恵が極めてローカルにならないように、リスクを即座に抽出できる体制として、どのような工夫や手段が考えられるのか。一旦境界を取り払うのならば、多様性も重視しつつ幅広い享受もまた境界を取り払うことができるような、見えない壁を乗り越えた終結もまた真剣に考えていかないといけない側面に来ていると思っています。簡単に「グローバル」と言ってしまう時代に、「グローバル」の皮をかぶった「国際化」の姿—欧米他、先進国主導の医療推進とならずに、「グローバル」とともに「お隣さん」を大切にできる姿—ATLAS(国がん) が目指しているようなアジア間での密な連携もできるような、

そんな新しいグローバルの姿を、医療薬品開発のデータシェアリングを通して見ることができたら、と成功を祈っております。

- アカデミアにおける URA の資質。
- URA に関する知識が浅いため、事例などを通して理解を深めたいと思っております。
- セキュリティについて。
- URA について不勉強なため、どのような事案を URA の方に相談すべきか教授いただきたいです。
- 実務能力の具体的な研鑽方法について。
- URA が支援業務を通じて目指す今後の大学の在り方。
- 実際に着手したい場合の手続きの方法が知りたいです。データ解析で不明点があった場合の相談先などがあるか、勉強を進める上で参考になる web サイトや本について知りたいです。
- データシェアリング、リアルワールドデータ利活用はデータ駆動型研究を推進するには必要な要素であるが、データシェアリング、リアルワールドデータによるビッグデータ構築運用が進まない要因は何か？一つではないと思うが、要因に対して URA が果たせる役割は？
- 国がオープンイノベーション促進して、予算をつけたり、理系学生数の維持もしくは拡大を目指していたりするが、大学における URA になるための専門教育や、生命医療工学系学部でのアントレプレナー教育は今後日本においてどう実装されるのが好ましいか？
- 日本が世界に比べて URA が浸透していない原因や、今後の課題等を知りたいです。
- ”研究支援”という位置づけには、少し魅力が薄れ、大学としての研究戦略の立案の中で、個別の研究者がいるという位置づけにすることは難しいのでしょうか？
- 例えば病院の組織では大きく「医療職」と「事務職」の二つに分かれますが、URA はどのような位置付けになり得るのでしょうか。私は「治験事務局員」ですが、組織の中では「事務職員」にあたります。専門知識を要するため努力を重ねても結局は「事務職」と処遇等も一緒にたにされるため、モチベーションの維持や増員のための採用にも影響します。今後「専門職」として組織の中で認めてもらうためには、院内においてどのような働きかけが必要となってくるのか、URA の組織内でのあり方等を参考にお伺いできたらと存じます。
- 当学では医学部側には URA が配置されていませんでしたが、最近医学部専任 URA が配置されるようです。ARO と URA の業務の切り分けや連携について、ど

のようになっているのか、どのようなあり方が好ましいのか伺えますと幸甚です。

- FA との連携の在り方をお聞きしたい。
- 医学系研究においては、URA と ARO の機能がオーバーラップしている部分があるかと思いますが、URA は全学組織で ARO は病院部門（もしくは医学部組織）という立て付けとなっている部分も多く、なかなか連携ができていないように思います。どうすれば連携が進むでしょうか。
- 医薬品産業は昨今特に、世界を見据えた戦略が必要と思われ、URA が役に立てる可能性も多くあると思いますが、どのような行動や役割を期待されるでしょうか
- URA の立ち上げや運営に際して重要なポイントを学びたいと思います。
- 今後 FA 側が改善すべきことについて。
- 日本における各大学での URA の育成や活動状況について。
- URA と事務職員の連携について。
- データシェアリングに URA がどう関与できるのか、とても興味があります。また、研究データの公開に反対する研究者も一定数いると思うのですが、どのように説得したら良いのかについても、ぜひ伺いたいです。
- 大学以外の中小病院やクリニックのデータ収集はどのように考えていらっしゃいますか？
- 日本の政策として、データシェアリングのネックとなっている点があれば教えてほしいです。
- URA に積極的かつ組織的に取り組んでいる国内の大学はどのくらいあるのでしょうか。
- データシェアリングと、機密性との兼ね合いをどのように調整し、関係者で情報共有しているのか知りたいです。
- URA 主導の好事例について（ステークホルダーとの連携の在り方など）。
- 医学部を持つ地方国立大学としての今後の生存戦略。
- 個人情報保護法を遵守したデータシェアリングの方法。
- データシェアリングにおける研究対象者からの同意の必要性。
- URA 人材のキャリアについて。
- 研究力分析に使用しているデータベース等の他学の情報。
- 研究データシェアリングにおける大学間の競争と協調の線引きについて。
- URA による支援業務と事務職員による支援業務の相違点。
- 大学における URA の評価体制について。
- URA 先生の支援業務に、事務方としてどのようなサポートがあれば有用か伺えればと存じます。

- 実際の臨床現場では、特に、若い学年の先生方は、大学に残って研究をすることの意義を見出せず、専門医を取ったら辞める先生も多くいます。臨床を続けつつ、研究のモチベーションを保つ方法について、何かお考えがありましたら、教えて頂きたいです。

講演（45分）

医療研究開発におけるグローバルデータシェアリングの重要性 ～研究者個人では不可能な URA による課題解決～

慶應義塾大学名誉教授・（公財）実験動物中央研究所 所長

末松 誠 氏

概要：地球規模のデータシェアリングは医療研究開発に不可欠であることは、新型コロナの対策を見ても自明の理である。しかしそれは生命倫理の第一第二原則にある意味相反する概念である。個人のプライバシー保護を推進しつつも、データ駆動型研究を推進するには、研究者が研究成果であるデータを共有することによって、研究者個々人では対処できない難題を解決に導き、医療および科学研究を飛躍的に推進させる方向へ舵を切ることが重要である。データシェアリングの導入には、研究そのものにも精通しており、大学間連携のマネジメントにも長けている URA の存在が必要不可欠であるとともに、期待される役割は大きい。データシェアリングの持つ可能性と URA 含む研究支援者に求められる力について、難病未診断疾患プログラム（IRUD）や新型コロナウイルス感染症におけるデータシェアリングを具体例として講演する。



パネルディスカッション(60分)

末松 誠 氏 (慶應義塾大学 名誉教授・実験動物中央研究所 所長)
松山 琴音 (学校法人日本医科大学 研究統括センター 副センター長)
丸山 浩平 (早稲田大学 研究戦略センター 教授)

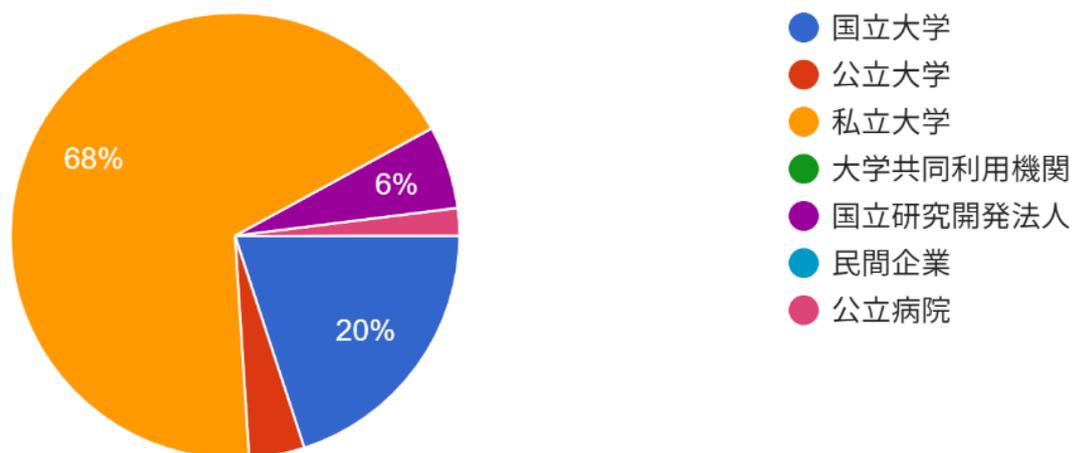
参加申し込み時のアンケートで参加者の関心が高かったテーマ、参加者よりいただいた事前質問についてディスカッションするとともに、末松先生のご講演に対する質問を参加者より受け付け、活発な議論が行われた。



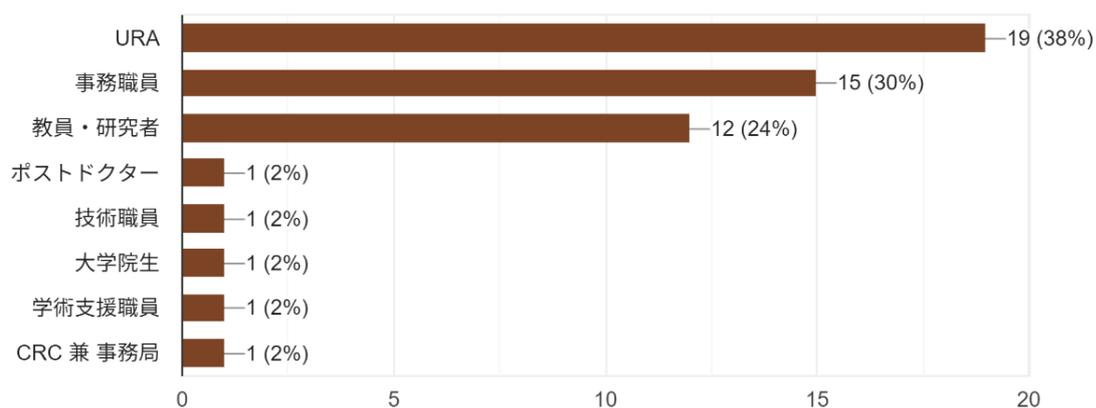
右から末松 誠 氏(慶應義塾大学 名誉教授・実験動物中央研究所 所長)、丸山 浩平 (早稲田大学 研究戦略センター 教授)、松山 琴音 (学校法人日本医科大学 研究統括センター 副センター長)

事後アンケート結果

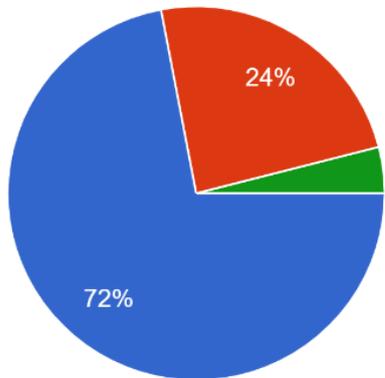
所属種別(50件の回答)



役職種別(50件の回答)

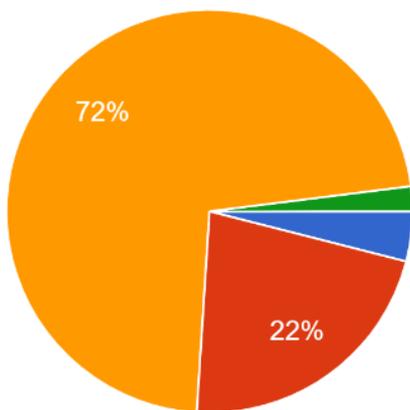


講演は参考になりましたか？(50件の回答)



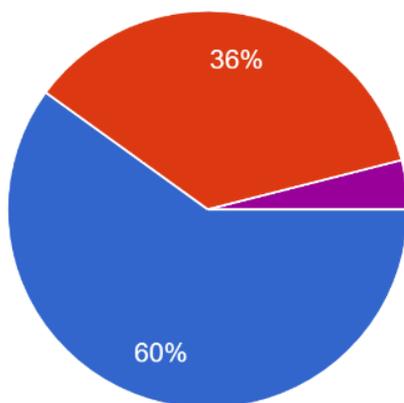
- とても参考になった
- まあまあ参考になった
- どちらとも言えない
- あまり参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

講演内容の難易度は？(50件の回答)



- 難しかった
- ややむずかしかった
- ちょうどよかった
- やや簡単だった
- 簡単だった

講演内容に関する満足度(50件の回答)



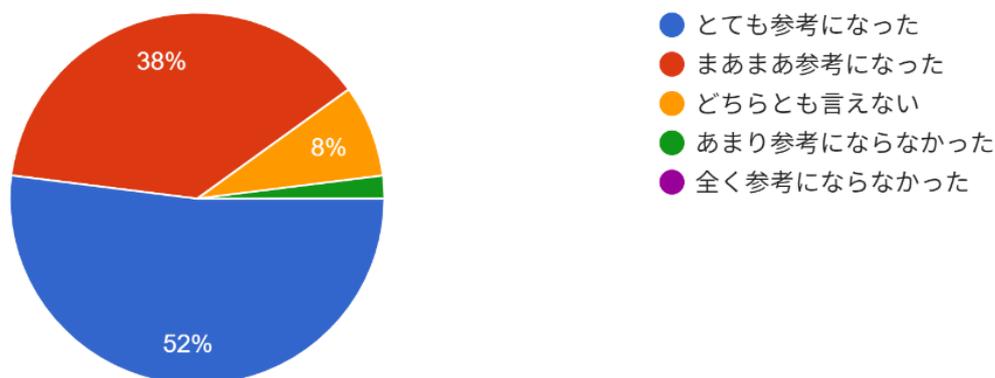
- 非常に満足
- おおむね満足
- どちらとも言えない
- やや不満足
- 不満足

講演に対する感想やコメント(23件のコメント)

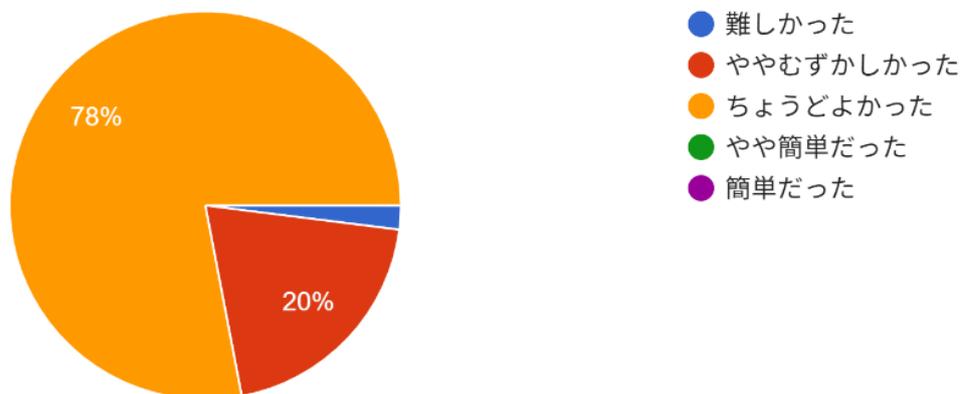
- 講演が非常に面白かったです。バイオバンクで勤務していて日々感じますが、コホート連携等のデータシェアリングは特に URA の活躍が期待される分野です。研究者だけでは限界がありますので、今回の様なセミナーをきっかけに URA 人材が増えていけば、日本の前向きコホート研究の活用がもっと進むと感じました。
- 末松理事長の話し方は引き込まれます。難しい話を分かりやすくお話しいただきありがとうございました。
- 久しぶりに先生の講演が聞いて楽しかったです。
- 具体例に基づくわかりやすい講演であった。
- 大学にいるのとは異なった観点からの発表でとても刺激になりました。
- お話自体は大変興味深く拝聴したが、スケールの大きい話が多く、実際にいち URA が取り組むという視点ではなかなか難しいことばかりだった印象。
- 末松先生の講義は大変興味深く、時間が経つのがあっという間でした。大変励みにもなり、支援業務を続けていくことに改めて「やりがい」を感じさせていただいた貴重な時間となりました。深く感謝申し上げます。
- データシェアリングの困難さと重要性を実感できた。
- 質疑応答含めとても分かり易かったです。
- 慶応の COVID 研究・国立感染症センターの協力施設として参加していましたが、研究結果の全体が見えないまま、労力だけがかかっている大変だった割には・・・外部の研究評価を聞くことができ良かったです。
- COVID-19 でのグレート・バリントン宣言、難病ゲノム DB でのリトアニアに関する話題など大変参考になりました。
- Great Demographic Transition の話に関して、今年の臨床試験学会でもお話があり、改めて時代が大きくかわる最中に、僕自身が医療体制にかかわっている不思議な感覚を覚えました。学術会議の任命問題でも顕著でしたが、政治と科学の相克や科学の Autonomy の問題に関して、資金がどうしても必要な医学研究では非常に深刻な問題となっているんだなど、改めて深い問題があることを学びました。GISAID や HIRO s の取組みのお話は、とても面白かったです。ただ 1 点、GDPR は GAF A に対するアンチテーゼとして解釈し得ることを知り、Aktion T4 での人権反省から出芽した「個人情報＝人権」という概念が、今後グローバルと相克せずにやっていけるのか、僕自身の中で気になってしまいました。
- 事務職員にとっても聞きやすい内容にしてください感謝しております。
- 専門職でない者でも興味湧く事柄を取り入れて下さった内容でとても良かったです。
- 興味がそそられる話術に感動しました。内容も勉強になりました。

- 末松先生のご講演は面白いものの、URA 研究戦略マネジメント勉強会に期待した内容とは違って残念であった。
- COVID などの具体的な事例で、情報共有に関する課題や現状をお聞きできて大変参考になりました。大学間の連携などについてもご意見をさらにお聞きできるとよかったです。
- 医学系を持たない大学なので、ダイレクトには参考にならない内容だが、一般的にとっても納得できる内容でした。
- IRDiRC や HIROs のお話が興味深く、有事対応など大変勉強になりました。
- 論理的でなく、何を趣旨としてお話されたか分かりにくかった。
- とても興味深く、勉強になりました。
- とても分かりやすく、内容の濃い講演だった。
- 意識のギャップ（猪木アリ状態）は常に感じています。

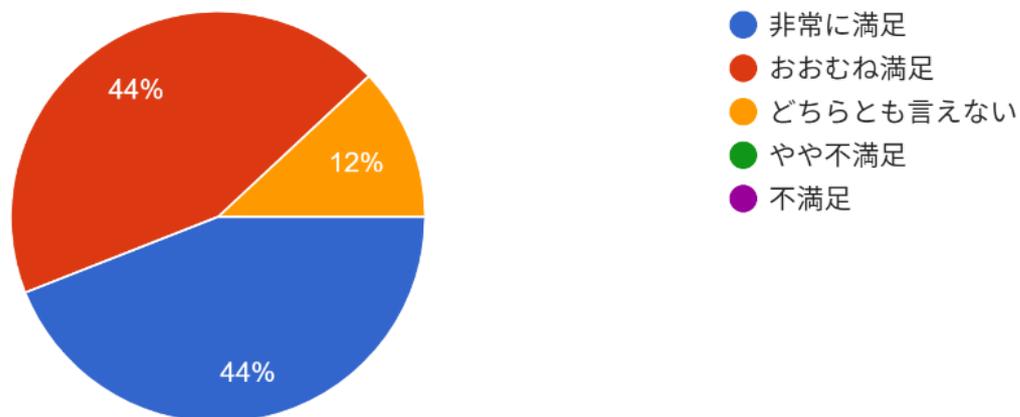
パネルディスカッションは参考になりましたか？(50 件の回答)



パネルディスカッション内容の難易度は？(50 件の回答)



パネルディスカッションの内容に対する満足度(50件の回答)



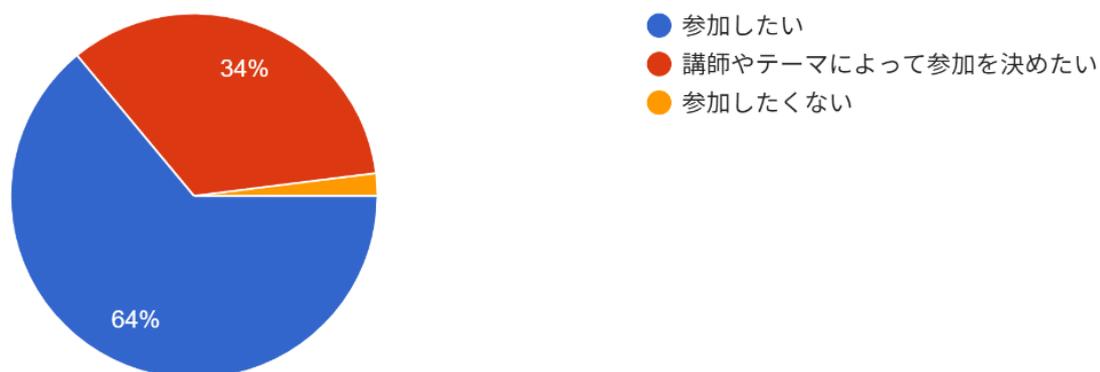
パネルディスカッションに対する感想やコメント(15件の回答)

- 末松理事長の高い志を聴け、またときにブラックジョークが楽しかったです。
- URA の意見が出るのは驚きました。
- うまく公演の先生の考えを引き出せていたと思います。
- 講演に関する感想と同様。聞きたかったこととは違ったけれど、お話の内容自体は大変興味深かった。「研究者に気づかせてしゃべらせる」という視点は、目からうろこだった。
- 「めげない、おれない」の不屈の精神で、今後自身がやりたい支援業務に、エラーを恐れずトライしていこうと思います。
- URA が特定の大学に閉じず、日本のみならず世界に貢献するような仕掛けができればよいと思いました。
- なかなか口に出せない既存の無期雇用職員とのコンフリクトを乗り越え、予算の仕組みを変える必要がある、とのお話が興味深く、もっと伺いたかったです。
- 質問に答えていただきまして、ありがとうございました！Equity と Justice とを貫く真摯な取り組みに、どこまで医療が入っていけるのか、とても印象的なお言葉でした。個人的には「隣の芝生は青く見える」の観点で、自分の置かれている大学の悪い面ばかりが見えてしまう事がありましたが、今日先生が「自分の大学の個性をどのように伸ばしていくか？」の話を熱く語っていたことが、感銘を受け、参加して良かったなと感じました。自分なりに良かったと思える病院のモデルを様々に集めていって、それに挑戦できる下地を構築できるように、Trial&Errorができるような環境づくりに、日本医科大学職員としてどこまで貢献していけるのか、また足元の魅力にどのように気付いていけるのか、忙しく働いている中でも、常に心に

気に留めて仕事していきたいと思いました。難しいことは分かっていますが、難しいからこそ、挑戦していきたいと感じました。

- 非常に有意義なものだったと思う。事前アンケートに対する末松先生の回答も即座になされ、暇な瞬間は全くなく聴き入ってしまいました。
- 参考になりました。
- URA の活動推進における考え方などをお聞きできて参考になりました。諸外国の URA の事情なども気になってきました。
- 末松先生のプロジェクトを推進する上で、信頼・公平性・正義を大切にされているという言葉が印象的でした。
- より深くお話しが聞けて良かったです。
- 「URA の定着率の低さ」に関する要因の説明は、大変説得力がありました。
- 同じ URA として共感できる点が多々ありました

本勉強会には今後も参加したいですか？(50 件の回答)

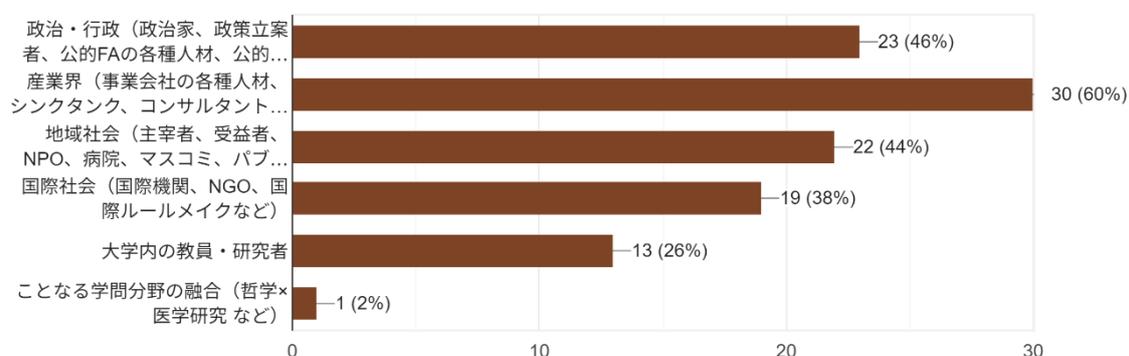


今後の勉強会参加に対する理由(13 件)

- 日本の URA が手を取り合って、日本の医療研究を推進したい。
- 関心のあるテーマに期待したいから。
- URA として、さまざまな観点からの情報はとても重要に思います。
- あまりにも担当業務からかけ離れている内容の場合は、他業務との兼ね合いで検討したい。
- とても良かったです。
- うちの大学では得られない知見が得られる。
- 知らない世界を知って「相手が何を言っているのか全然わからない」という経験をする事の大切さを、もっと肌で感じたい。

- 専門職でなくとも勉強になる。
- テーマもありますが、講師の話術により業務外のテーマでも興味に繋がるものもありますし、逆に関係があるテーマでも講師によってはつまらないものもありますので、上記理由を選択しました。
- より多くの事例やご意見をお聞きして勉強したいと考えています。
- 新しい動向など参考にさせて頂きたいです。
- URA に必要と思われる重要な問題について様々な知見が得られるため。
- URA の知識を向上させたいため。

今後、どのセクターの講師から話を聞きたいですか？（50件の回答）



今後、取り上げてもらいたいテーマや要望、話を聞いてみたい講師のお名前など（10件の回答）

- 日本のバイオバンクや研究所など、大量の検体やデータを扱い管理しているような組織で活躍される URA の方がいらっしゃいましたらお話を聞いてみたいです。どのような仕事をされていて、トレーニングはどのようにしたか、など具体的な話をきいてみたいです。
- 生成 AI。
- 企業とアカデミアのマッチングの進め方について。
- 大学 IR、戦略系アドミニストレーターの仕事と、公開 NG/OK な大学のデータ、活用状況。2) 研究力向上と社会価値創出に成功している私学の事業運営や財務の手法の例。
- お話を伺う中で、ハンス・ヨナスの「責任という原理」が頭をよぎりました。これから求められる新しい科学像として、どのような姿勢が必要なのか。医学研究のトップにいる方と、科学技術文明に対して深く考察している哲学者と、誰も予想でき

ないマッチングが、この研究会のステージで実現できることを楽しみにしております。戸谷洋志先生、とかでしようか…？また良いものをどんどんシェアリングするに向けて、どうしても過去の軋轢—文化、民族、宗教—が見えてこない形で、何らかの影響を与えるのでは？とやはり感じています。過去を振り返らずに未来志向で、人類共通の財産や equity という旗を掲げて、誰かができるところから進めていくことも大切です。しかし法文化やナショナリズムに対しての姿勢も、同じくらい大切であると、過去の学会（日本生命倫理学会）で深く学びました。個人的な興味ではありますが、アスマン「想起の文化：忘却から対話へ」をはじめとした、医療者がまず知る機会の少ない学問領域に対しても、医療側から切り込んでいてもらいたいと感じました。

- 産学官連携における URA の役割、大学間連携など。
- 国際動向の把握の仕方など。
- URA の定着支援策やキャリアパスの問題等について。
- 海外の URA の状況。

コメントなど自由にご記載ください(14 件)

- 末松先生のパワフルなお話に、非常に気持ちが鼓舞されました。全国に広く貴重な機会をお知らせいただき、ありがとうございました。
- 前回も同じことを感じた記憶があるが、URA 本人ではなく、URA を管理・雇用するマネジメント陣に視聴してほしいと強く思った。
- web で参加できるこのような機会をありがとうございます。
- めげない、折れない、マインドセット、大学への愛着、との激励がありましたが、奉仕の精神にしんどさを吸収させたままでは閉塞感が打破しないと思います。英国 NIHR の Biomedical Research Centres (BRCs) の紹介は参考になりました。
- 本日はこのような貴重な勉強会を実施していただき、ありがとうございました。私自身知らないことが多く、大変勉強になりました。またの機会がありましたら、ぜひ参加したいと思います。今後ともよろしく願いいたします。
- とても良い勉強会でした。準備等お疲れ様でした。
- ご担当事務局の皆様には、開催にあたり多方面へのご尽力誠に有難うございました。
- ご準備担当の皆様大変お疲れ様でした。URA や大学での研究の在り方を考えるととてもよい機会となりました。引き続き、こうした刺激を受ける機会を継続いただけるとありがたいです。
- とてもいい勉強会でした。
- 会の運営、大変お疲れ様です。今回も大変勉強になりました。大変心強く、自身の URA 像と重なって勇気を持ってました。少し残念な点としては、ご講演の内容（アウ

トライン)をもう少し把握できていればもう少し突っ込んだ質問をしたかったなというところです。刺激的なコメントが多く、もう少し聞いてみたいことはありました。ただ、運営の観点からは、事前にできるだけ情報を公開していくのは難しいとは理解しています。自由討論の時間がもう少しあってもよかったのかな、と思いました。

- 貴重な機会をつくっていただき誠にありがとうございました。大変勉強になりました。
- ありがとうございました。企画は素晴らしいと感じましたが、ご講演が本当にこの企画に合った内容であったかは疑問に感じました。URA はどの分野にも共通する仕事であると理解しており、医学的な研究の話題のみであったのも残念でした。やはり、日本は、アカデミア＝医学なのかなと少し残念に感じたところもありました。ただ、URA が、このような企画を通じて、どのような役割を果たしていくかという議論の場があるというのは素晴らしいと感じました。
- 勉強会の回数をさらに増やして定期的を開催してほしい。